

# 仕事人秘録

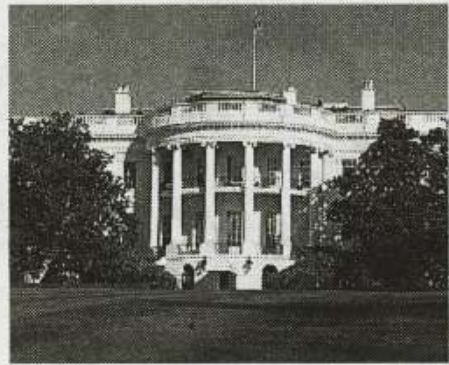
1970年1月、平松氏は希望を胸に読売新聞ワシントン支局で働き始めた。

支局の場所は13番ストリートとFストリートの角にあったナショナルプレスビルの中にあつた。ホワイトハウスから3ブロック離れたこの場所に読売新聞は当時、支局長だった渡邊恒雄氏以下4人の記者を配置していた。

今もそうだが、米国の首都であるワシントンDCには世界中のメディアが集まり、取材競争にしのぎを削っている。日本の大手マスコミも例外ではなく、当時のNHKの支局長は磯村尚徳氏、朝日新聞の支局には

## 人に恵まれた転職人生 ④

元ライブドア社長  
平松 庚三氏



平松氏は取材でホワイトハウスを度々訪れた。AP

### 特大ニュース逃す大失態

仕事をこなし講義は非常にきつかった。いく渡邊氏が、徐々に支局助手との二足はダンディーのわらじにも慣れていっに見え、あこた。米国は当時、ベトナムと戦争していた。すでに

最も若い記者で筑紫哲也氏がいるなど、各社ともエース中のエースを送り込んでいた。一方、私の英語力はとて

も褒められるものではなかった。おかげで、渡米後の約1年間はメリーランド州

泥沼の様相を呈しており、世界中で反戦の機運が高まりつつあった。いつ米国がホー・チ・ミン率いる北ベトナムへの爆撃をやめ、停戦に踏み切るのか。ホワイトハウスの動向に国際的な関心が集まりつつあった70年初夏のある日、私は休日突発的なニュース発生に備える出社番の仕事を終え、帰宅して

そんなワシントン駐在記者の中でも、渡邊氏が仕事に厳しいことは有名で、「鬼のナベさん」と言われている。とはいえ、国際ジャーナリストにあこたがれて渡米した私にとって、常にパイクをくわえ、さっそうとスカッションを主体とした。そんなワシントン駐在記者の中でも、渡邊氏が仕事に厳しいことは有名で、「鬼のナベさん」と言われている。とはいえ、国際ジャーナリストにあこたがれて渡米した私にとって、常にパイクをくわえ、さっそうとスカッションを主体とした。そんなワシントン駐在記者の中でも、渡邊氏が仕事に厳しいことは有名で、「鬼のナベさん」と言われている。とはいえ、国際ジャーナリストにあこたがれて渡米した私にとって、常にパイクをくわえ、さっそうとスカッションを主体とした。

た。今でも悔やまれるのはサマータイムに移行して、原稿の締め切り時間が1時間延びたことをすっかり忘れていたことだ。翌朝、1つの特大ニュースが世界中の新聞の1面トップを飾った。米政府が北爆を停止する声明を発表した。歴史的な大事件だった。だが、恥ずかしいことに読売新聞だけが通信社の配信記事を流用せざるをえないという大失態だった。

「おまえなんか、もう日本に帰れ！」。渡邊支局長のばせいが支局内に響き渡った。私は顔面蒼白（そうはく）になり、土下座して謝罪したが、許してくれない。もうただただ悔しくて悲しかった。号泣しながら、私は床に正座し続けた。